



## アラスカ学校訪問記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9881">https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9881</a>

## アラスカ・フェアバンクス及びその近郊の学校訪問

釧路校アラスカ学校訪問団学生

釧路校は、アラスカ大学フェアバンクス校（教育学部）と姉妹校交流の関係があるが、今回（2006年9月18日から10月8日）、その教育学部長 Dr. Eric. Madsen 教授、異文化理解学習センター長 Dr. Ray Barnhardt 教授、Patt Caldwell 教授等の御協力によって、フェアバンクス市内外の小・中学校を中心とした学校訪問を実施した。

釧路校教育内容・方法研究室や生物学研究室では、これまで何度かアラスカの学校訪問・自然体験やモンゴルの学校訪問を行っているが、2006年度、本学の学部再編に伴い、新たに釧路校カリキュラムの研究発展科目に「アラスカ体験実習」として盛り込まれた。「アラスカ体験実習」の目的は、アラスカの学校訪問・交流活動（へき地校を含む）及び自然体験活動（野外活動）を通して、異文化理解学習・国際理解学習や自然学習を行い、その認識を深めることである。

今回のアラスカ学校訪問は、そのプレ的位置づけとして実施したもので、2006年1月に入り、参加希望者を募集し、参加者の確定後、アラスカについての事前学習、日程・ホテル・航空券・会計などの実務担当者の決定とその実務、訪問校等での交流内容（日本文化紹介・踊り、交流活動の教具・ものづくり等）の検討と準備を参加学生を中心に進められた。訪問校等のコーディネートや滞在中の日程づくりについては、フェアバンクス校の Eric. Madsen 教授と Ray Barnhardt 教授にお願いし、その連絡は教員（高嶋）が行った。訪問団は、10名の学生（吉成優子（院2）、前川由季（3）、波多野めぐみ（2）、今野里音（2）、太田貴子（2）、佐藤美菜（2）、北川智之（2）、高久全生（2）、谷井智美（2）、淵上菜穂子（2））と、引率・指導教員として神田房行（副学長・釧路校）・倉賀野志郎・高嶋幸男の3名があたった（括弧内は学年）。

今回訪問した主な学校等は以下の通り。

① Chinook Montessori School (9/25) ② University Park School (9/27) ③ Wood River School (9/27) ④ Nenana School (9/28) ⑤ Ann Wien School (10/2) ⑥ Two River School (10/2) ⑦ Nordale School (10/3) ⑧ Denali Elementary School (10/4) ⑨ Effie Kokrine Charter School (10/4) ⑩ Yukon-Koyukuk School District office (10/3)

では、今回のアラスカ訪問は学校訪問をはじめ博物館やナショナル・パークその他を含め多岐にのぼるため、本報告では訪問した2校について、その訪問の様子や感想を、学生の記録から紹介する。

（以上、高嶋記）

### ・ Wood river elementary school（9月27日）

パット先生の案内のもと wood river に向かいました。学校についてまず、玄関で校長先生と挨拶しスクールカウンセラーの方を紹介していただきました。そして先生たちの休憩室のような部屋に案内され、そこに荷物を置かせてもらいました。そこでスクールカウンセラーの方に私たちの意向を伝え、理解していただきました。訪問中はスクールカウンセラーの方が私たちについて案内、それぞれのクラスでの紹介、伝えきれないことの通訳、必要なものの準備などをしてくれました。本当にお世話になりました。先生たちの休憩室では先生が出入りしていて、台所もあり昼などを食べたり会議などするところらしいです。アメリカの学校はだいたい職員室というものが無いらしく、先生の部屋は教室だけなんだと実感しました。先生同士がいつも顔をつき合せていることがないのは先生同士の交流の場が少ないのではないかなとも思いました。

校舎は新しく、中もとてもきれいでした。日本の学校とは違い壁やドアがとてもカラフルでした。教室の一つ一つ先生の工夫で違ってとてもカラフルで私なら楽しく毎日過ごせるなとも思いました。アメリカの学校がカラフルなのは研究でカラフルな色が脳の働きを活性化させるというデータに基づいてスクールカウンセラーの女性いるということを知りました。この学校は幼稚園から6年生までの子供たちが通っていました。

#### ① 訪問スタート

学校の予鈴がなってまず放送が入り、私たちのことを紹介してくれていました。その後、授業見学や学校の施設を一通り見せていただきました。音楽、体育、図書室での授業観察をしました。音楽の授業では打楽器の演奏が行われていました。みんなに楽器がわたっているのが印象的でした。体育の授業では体育館でしっぽ取りゲームのようなものをし



ていました。体育の先生は体育専門の方で、マイクをつけて指導をしていました。しっぽ取りゲームも専用のしっぽをつけていて、腰にベルトのようなものをつけるようになっていて、少し引っ張ると簡単に外れるようになっていました。

図書室では司書による授業が行われていました。絵本の読み聞かせで、週1～2回の割合で図書室での授業があるとのことでした。子供たちは真剣に聞き入っていました。

次に教室訪問へと移ります。私たちは1年生→4年生→2年生→1年生と回りました。

## ② 1年生

担任の先生が元!? (今もかな?) ミュージシャンで教室には自分の新聞の切抜きなどがありかなり自分を押し出している感じがしました。さらに教室にはミニステージがあり、楽器も設置されていて私たちはかなりの衝撃を受けました。教室に入ったときは算数の授業中でした。

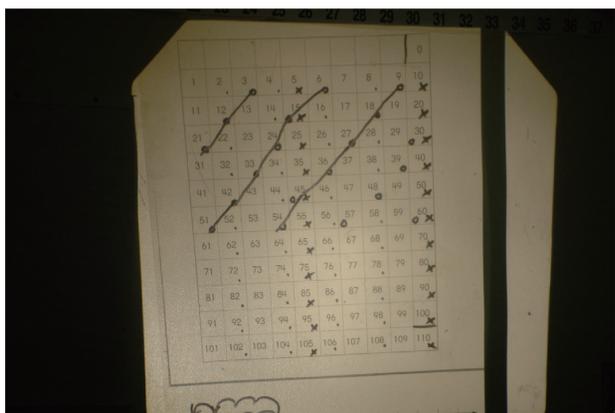
数字の書いた紙をプロジェクターに映して、5の倍数を順番に答えていました。挙手ではなくみんなが答える感じでした。

授業がひと段落したところで、スクールカウンセラーの方と担任の先生の交渉がはじまり、担任の先生の承諾を得たところで、スクールカウンセラーの方の紹介から始まり、日本の簡単な紹介、ふるさと合唱をしました。私たちの歌の後、先生がギターを演奏して子供たちがお返しに歌ってくれました。

歌ってくれた歌は振りつきの歌で子供たちはとても楽しそうに歌っていていつも先生がギターを取り出しては子供たちと歌っているんだろうなぁと思いました。

## ③ 4年生

このクラスで私たちがしたのは次の3点で、日本紹介→折り紙でつる作成→カタカナで名前を書く、です。担任の先生が日本に行ったことがあるらしく、また日本が好きなお方であるらしく日本についての本がたくさんありました。日本語の挨拶で私たちを迎えてくれました。



つる作りは一人が前に出て説明をしながら作り、それと平行に4つのグループに1人ずつ入って子供たちのサポートをしながらグループで1つの新聞折りづるを作りました。私たちは何枚かの説明用紙を持っていっていましたが人数分はありませんでした。そこでスクールカウンセラーの方が子供たち分コピーをしてきてくれました。子供たちはとても楽しそうに仲良くつるを作ってくれました。できたときは“COOL!”という声をたくさん聞くことができました。そのあと名前書きにうつりました。学生が子供たちに名前を聞いてカタカナに直し手本を書いてそれを真似するという形をとりました。なかなか聞き取るのが難しくこんな感じかな??という感じで書きました。子供たちの名前を聞いていてアメリカっぽくない名前もたくさん聞きました。私が聞いた中ではロシア系やネイティブがあったように思います。名前を書いてあげるとまたもや“COOL!”を聞くことができました。英語は横読みだから私たちが縦に書いたカタカナも横から読んでいる子もいました。ただなかなかには上から下へ読むの?と質問してきた子もいました。みんなが書き終わった後その名前をつるの羽や胴体に貼り付けました。1つの作品の出来上がりです。

みんなすごく喜んでくれました。できたあとは自分のラストネームもカタカナで書いて欲しいと言う子が出てきて次々に書いてほしいと頼まれました。とても気に入ってくれたんだと思うと本当にうれしい気持ちです。学生もとても楽しめました。

#### ④ 2年生

2年生のクラスでは担任の先生の方針で写真の記録を残すことができませんでした。2年生でも日本紹介、歌、折ると名前の3つを紹介しました。倉賀野先生の見方によると、ネイティブも混じったクラスで不用意に情報が流れるのを防ぐために写真を禁止したのではないかということでした。日本の小学校ではよくありそうなことだと思いました。アメリカでも同じようにあるんだなと思いました。

#### ⑤ 1年生

簡単な日本紹介から始まり、折り紙でのつる作成、カタカナで自分の名前を書くという、4年生と同じ3点を行いました。ネイティブの子もいて個人的に私はネイティブの言葉で話しかけられました。日本人と顔かたちが似ているから間違っただのかもしれませんが。なんて話しかけてくれたのかすごく気になりました。私にもわかったら良かったのに…。このクラスには先生がたくさんいました。特別支援で障害のため少し学習の遅れのある子にマンツーマンでついていました。最初は名前だけにしようかと思って名前から入りました。1年生ということもあって日本人と触れるだけで大変なことだったと思います。カタカナで名前を書くのも大変そうでした。やはり1年生でまだ10月だし、自分の名前をローマ字



名前を書く様子

で書くのだって精一杯だと思うのにとても一生懸命真似をして書いてくれました。文字を書いているより模様が何か書いているみたいにとっても難しそうでした。今回用意したものは3年生以上がちょうどいいのかなと思う瞬間でもありました。

次に時間もあつたのでつるも折ることにしました。前に訪問させてもらったクラスと比べると食いつきはあまりよくなかったなあと思いました。折り方が複雑で1年生には難しかったこともあると思います。

最後に作ったものをすぐに天井からつるしてくれました。まだ飾られていて、みんなの心に日本文化の面白さが伝わっているといいな。

#### ⑥ 学生の感想

- ・何がしたいのかを主張するのがアメリカなんだと実感した。
- ・誕生日の子を朝の全校放送で言っていたことがすごくいいことだと思った。
- ・つる作成で名前を書きたくない子への対応に困った。
- ・日本の原爆の話のさだこの教科書が使われていた。
- ・先生によって教室の雰囲気が違う。
- ・建物がカラフル
- ・音楽の時間子供一人に一つ楽器があたっていた。日本では足りないのでは…？
- ・訪問は4年生が一番受けが良かったように思う。
- ・障害を持った子にはマンツーマンの形で教師がついている。
- ・ジャップ（日本人を馬鹿にする言葉？）と言われた。

日本の学校に比べて教室にいる生徒の数が少ないのに対して、先生の数が多いことがすばらしいと思いました。一人の子に対する対応も濃いものになってくると思うし、日本の教育現場で見習ってほしいところがたくさんあったし、日本の教育のすばらしい一面も見ることできた訪問だったと思います。

#### ・ Effie Kokrine Charter School (10月4日)

学校前では、Ray先生が迎えて下さった。まず、学校の入り口前のフェンスに囲まれた畑がまず目に入る。これは、UAFの大学院生が中心として行っているGarden Programの畑だそう。そこで野菜を育てるそうだが、もう収穫はすでに終わっていた。この庭を利用して数学や科学を学んでいるという話だ。その庭の周りには、ムースの侵入を防ぐために電柵のフェンスがある。でも、「今は、電気は通っていないので、心配ないよ」とRay先生が教えてくれた。また、ここには川があり、虫がいて、動物もいるとおっしゃっていた。

学校に入り、校舎内を見学した。学校は1階建だった。この校舎は、閉校になった学校を再活用したということだ。玄関を抜けて、まず目に入ったのが、絵が描かれた立派な柱が目に入った。この絵は様々な場所で目にするが、赤、白、

黒で描かれたクリンキット族の絵である。また、廊下の壁には、グリーンの絵が描かれている。黄色やピンク、緑が入って、とても素敵な絵だった。その上には、鳥の模型が飾られていた。

そして、荷物を部屋に置いてから、いくつかの教室を見学した。Room109は、Elders Room で、年配の女性がいた。Elder は、授業の中で生徒の手助けをしたり、逆に生徒が Elder の部屋を訪れたりするようだ。

次に、Ray 先生から、この学校についてパワーポイントやビデオを使って詳細なレクチャーがあった。

2005年8月18日開校、現在2年目が始まったところである。5年前、アラスカでは、ネイティブの高校生の25%が落第・中退・退学していた。数にすると、25,000人のネイティブということになるらしい。そうした問題の解決の一方策として、Effie Kokrine Charter School が設立された。現在、7～12年生までの学生が166人いて、そのうちの93%がネイティブである。15人の教師と1人の校長がいる。1クラスの人数は20人以下で、一日のスケジュールは、10時から16時である。

また、学校の設立理念やカリキュラム・教育方法等についてのレクチャーでは、運営や組織、協力・支援組織や監督機関、そしてこの学校の象徴的人物であるグランマ Effie Kokrine のこと、EKCS 使命や教育目標、教育哲学、さらに文化の価値を基礎にした12の文化テーマを基にした7～12年生のスパイラルカリキュラム、さらにはEKCS/アサバスカンの文化の価値や生徒の優先すべき学習スタイル・教授アプローチを強化し、ネイティブの方法を統合し、ネイティブの文化を尊重し、学校の豊かな文化遺産を実行するための助言者として参加を重視することなど、である。

Ray 先生の話の後、体育館に移動して生徒に花笠音頭を披露することになった。まずは、日本の紹介と花笠音頭の説明などをして、踊りに入る。その後、「一緒に踊ってみませんか?!」と誘ってみる。何人かの生徒達がそして先生方も一緒に仲間に入り、大きな輪になる。初めに、基本的な型を一つ一つ教えてから、音楽に合わせて踊る。短い時間ではあったが、何とか形になり、皆で楽しく踊ることができた。

すると、一人のネイティブの先生がドラムを持ってきて、彼らのダンスを披露してくれた。アンカレッジのネイティブ・ヘリテッジ・センターで見た踊りと同じだったが、私たちも、その輪の中に入り何度も一緒に踊り、一体感を感じながら楽しんだ。

最後に、3グループに分かれて、授業見学や日本紹介を行った。私は、高嶋先生、前川さん、北川君と一緒に7年生の Olga 先生のクラスを見学した。はじめに、少しだけ私たちの自己紹介と日本の紹介をした。その後、彼らから「日本の人口は?」「日本は寒い?」などの質問があった。また、逆に「なぜこの学校を選んだのか?」という質問をした。それに対しては、「友達・いとこがいるから」、「授業のたびに、クラスを移動しなくていいから」「午後、文化の勉強ができるから」などの返事が返ってきた。

その後、普通の授業の様子を見せていただいた。Business の授業で、お金を作るためにどうするか、仕事をどう考えるか、などについて学んでいた。事前に見ていたカリキュラムの表に、この時期は、ANCSA (アラスカ先住民土地請求解決法) について学ぶと書かれていて、中でも7年生は職業計画準備が学習内容であるとなっているので、その学習をしていたと思われる。

太田さん、淵上さん、高久君、佐藤さん達は、お互いの自己紹介の後、日本の歌を歌い、グループに分かれて一緒に鶴を折ったようだ。お礼に、本とサーモンをもらったという。

それから、授業が終了し、生徒たちも帰る時間になり、スクールバスに乗って帰っていった。私たちも事務の方や先生方に挨拶をして EKCS を後にした。

